

タナゴの棲むふるさとを未来へ ～池干しと地域の生物多様性～



「ため池の水を抜いて泥を減らす「池干し」。昔、農家の人はおいしいお米を作るため、農閑期にため池の水を良い水に入れかえ、大切に管理してきました。「池干し」は水質の改善だけでなく、ため池にすんでいるタナゴなどの生き物の生息環境を守ることにつながる取組みとして、新たに注目されています。

「里川」を代表する淡水魚「タナゴ」



タナゴ類とは、コイ目コイ科タナゴ亜科の総称であり、日本のタナゴは16種類にわけられる。写真はタナゴ類のアブラボテ（三重県）で全長6～7センチ。

【お話を伺った人】

東海タナゴ研究会



左 きたじま じゆん や
代表 **北島 淳也**さん
名古屋大学大学院環境学研究所
全国タナゴサミット 事務局長、サトガワキカクLLC 代表

右 さかえだ まさ ふみ
榊枝 正史さん
名古屋大学大学院環境学研究所/株式会社東産業



平成16年設立。研究者や学生などの若いメンバーを中心に三重・岐阜・愛知・滋賀などで活動しています。タナゴを中心とした里川の生物多様性保全を目的に、生態学的、社会的調査・研究とため池の「池干し」などを行っています。

里川から姿を消したタナゴ

タナゴは田んぼの横の水路やため池などの「里川」に生息する淡水魚です。河川改修や水路の三面護岸工事などにより、タナゴの生息地は少なくなってきました。日本在来のタナゴの仲間には、絶滅危惧種に指定される希少な魚です。

かつては農家が定期的に池の水を抜く「池干し」や草刈りを行い、ため池や水路の管理をすることで、タナゴなどの里川の生き物たちが守り続けられてきました。

しかし近年は、農業形態の変化などにより、ため池の役割が薄れ、「池干し」の機会もほとんどなくなってしまうと。放置されたため池は水がドロドロになり、池の生き物にとっては、よくない環境になっていきます。

そこで今回は里川の生物多様性を取り戻そうと「池干し」を復活させ、タナゴの保全活動に取り組む「東海タナゴ研究会」にお話を伺いました。